

針葉樹会報

1996. 11. 第83号



発行日 1996年11月30日	針葉樹会報 第83号	編集人
発行所 針葉樹会		〒121 東京都杉足立区島根 2-32-19-405
印刷所 篠田印刷		稲毛 尚之



針葉樹会報 第83号

目 次

黒部の「山賊」	岩崎 利一	1
中国二名山行	山崎 擴	2
アメリカ山歩き	石井 左右平	4
華山に登る	横山 皖一	8
台湾最高峰玉山主峰に立つ	上原 利夫	11
北海道・幌尻岳と東北の山々	上原利夫・有賀 盈・高橋信成	12
春の未丈岳	藤本 敏行	15
アリューシャン列島 シシャルディン峰登頂記	石川 保典	17
会務報告		19
編集後記		21

表紙写真説明 上陸地点からシシャルディンの頂が一瞬見えた。
だが翌日からは何日もの嵐に。

黒部の「山賊」

岩崎利一

書架を見ていたら、「黒部の山賊」(伊藤正一

著昭和五十一年実業之日本社刊)という本が出て来た。初版は三十九年に出居り、これは第三版で、表紙の裏に「伊藤正一 一九七九年七月二十五日三俣山荘にて」と記入がある。そして三俣山荘のゴム印まで捺されている。入手の径路はすっかり忘れてしまったが、今度改めて読み返して見て驚いた。その中の「山賊」の一人遠山林平とおやまりんべいに、私は昭和十年の九月黒部で会い、その小舎に故林俊介氏と一緒に泊めてもらったのである。

針葉樹第八号の二一四頁に、「劔より薬師岳、薬師沢、有峰」の山行記録の昭和十年九月四日の項が、左の様に林氏の筆で書かれている。

「九、四 雨 (薬師沢) 右俣中俣出合露营地

(一〇、〇〇〇) 左俣へ——歩道(一〇、二〇〇)——
薬師沢黒部本谷出合(一一、一〇〇)——
避難小舎(一一、二二五)

こう毎日雨では何ともしようがないので有峰へ引上げるつもりで荷をまとめていたところへ、平の遠山が来て小舎と道を教えてくれたので、今夜は其處へ泊って岩魚でも釣って食べようと思った。道は仲々良い。出合の橋は残骸もない。而し水量は少く徒渉も容易である。この出合から下流右岸に小舎は見える。夜は尺に近い岩魚で舌鼓を打った。」

林さんは私より三年先輩だったが、何となく気が合い大変お世話になった。黒部のこともよく調べていたらしく、岩魚釣の道具まで用意していた。黒部の平ダイラの遠山についても予備知識があったのだろう。それ程驚いた様子も無かった

が、狭い岩魚釣の小舎に泊めてもらうのには緊張した。私共が岩魚を釣ろうとして糸を垂れていても一匹もとれないのに、彼は夕方数匹も大きなものを釣って来た。それをいろいろの上に釣り下げて燻製にするのである。狭い小舎で一晚中生木をいぶしているのだから、ぐっすり眠れるわけがない。おまけに斧で鮮やかに木を割る姿を見せられては、不安が募るばかりである。岩魚の美味しさも忘れられないが、恐ろしかったこともたしかだ。

遠山氏は流石に精悍な感じはしたが、十数才私共より年長の落着いた態度で、一緒に話していて不快なことは何も無かった。然るべき値段を拂って、岩魚の塩辛の燻詰などもとめ、よいお土産が出来たと思った位である。彼は岩魚を上高地まで届けて、かなりの収入を得ているとのことだった。

私共はそれから有峰の殆ど無人の部落で一泊した後九月六日に高山へ出た。始め訪れた市内の宿屋であっさり断られたので、林さんが背広をリュックから出して出直したらOKだったのも面白かった。それに、列車の時間待ちに入った映画館の映画が「雨」という題だったのには、雨の山旅のフィナーレらしいジョークを感じた。

中国二名山行

山崎 擴

ここで中国としたのは、旧満洲（長白山、
《朝鮮名・白頭山》）および台湾（玉山、旧
新高山）のことであつて、平素から山行記
録など採らないこととあいまつて、大変ズ
ボラな話であることを、予めお断りしてお
かねばならない。

昨九五年七月はじめ、瀋陽での仕事を終えて、
かねての予定どおり長白山へ向かうべく空路東
へ吉林省延吉に飛ぶ。汽車もあるのだが時間が
かかりそうである。
延吉で一泊し、翌早朝雇ったタクシーで山麓
へ向かう。同行は二人、Y君はK2吉沢隊の登
頂者、J氏は中国人の研究所員。中国もすこし
奥地に入ると中国語が分からないと非常に不
由である。今回の旅もJ氏のお陰で行けたよう
なものである。

市街を出るとすぐ砂利道となり、山麓までソ
連製というガタ車での二〇〇キロはかなりの難
行となる。沿道は水田や高粱畑、朝鮮族が多い
と聞くが、貧しげな茅葺き屋根に殆どといつて
いいくらい、テレビアンテナらしきものが立っ
ているのに驚かされる。

昼過ぎようやく山麓の温泉ホテル着。この辺
り韓国人の観光客が多く、立派なホテルもあり、
すっかり観光地化しているのにちよつとがっか
りする。

午後、二道白河に沿って上り、瀑布を高巻き
して火口湖の天池へ登る。ここが火口湖からの
唯一の落ち口なのだ。巻道はけっこう険しいの
だが、韓国人のオバサンたちがたくさん登り降
りしている。韓国人にとって富士山と高千穂を
あわせたような聖地らしいのだ。

滝は落差六八米、広い岩壁を水量豊かに落ち
る。滝の上に出ると落ち口から川を覆って雪原

である。高度はもう二千米を超えている。やが
て天池畔に立つ。紺碧の湖面はさえざえと予想
以上に広い。周囲は五、六百米の岩峰が取り巻
き急峻に落ち込んで、ここ以外に渚らしいもの
も見えない。

対岸は三、四キロもあろうか、そこは北朝鮮
である。水深最大三七三米、水面の海拔二一九
四米という。湖岸にはまだ氷片が浮いていた。

以前に読んだ三高生梅棹氏等の六十年も前の
探検行を思う。彼らは朝鮮側から登り、外輪山
を巡って、この落ち口にたどり着いた。当時彼
らの宿となった湖畔の廃寺は既に跡形もない。
その後彼らがさまよった満洲側の原始林には自
動車道路が貫通しているのだ。

翌早朝、Y、Jの二人は昨日の天池までゆき
さらに湖岸から外輪山のガラガラ火口壁を登っ
て、天文峰にゆくという。彼らに付いて行ける
自信も無いし、なにしろ今日はまたガタ車を駆っ
て延吉夕刻発の飛行機に乗らねばならないのだ。
小生のみは温泉から、ジープに乗り天文峰に行
くこととする。これが普通の観光ルートである。
ジープは樹林帯を抜け气象台を経て殆ど外輪山
頂上近くまで行く。

天文峰は天池を囲む外輪山の一つであるが中
国側からはこしか登れないようである。最高
峰の將軍峰（二七四四米）など外輪山の殆どは
朝鮮側なのだ。

頂上には例の韓国人が大勢、今日もさえた青の美しい天池を見下ろしている。反対側は見渡す限りの裾野で流石に日本では見られない広さがある。三高隊が下山の目標とした孺頭山が遙かに霞んで見える。

やがて先行の二人と合流し、人込みの山を降りた。

予想外の観光地化にがっかりした山行ともいえない旅行ではあったが、その広闊な天地のありさまは、長らく持っていた白頭山のイメージを損なうものではなかった。それと一緒に根本さんのことを思い出した。

たしか石井の海軍入隊の送別の宴であった。すでに海軍将校である根本さんが鴨緑江節を唄った。不思議と海軍だけで唄われ陸軍は唄わなかった。凛々しい軍服姿で「白頭み山に、テンツルシャン：」と唄う格好が奇妙におかしかった。

今年三月、雲稜会のOB連中が玉山に行くのに連れていっても良いといわれ、早速お願いする。

台北では事前にいろいろ情報や案内人の手配などやってもらった台湾山岳協会に挨拶する。以前は同協会を通じなければ入山許可が降りないことになっていたが、現在では旅行会社など

でもやるようになったようである。

翌日チャーターしてあったマイクロバスに同勢六人と協会理事の林さんが乗り込んで出発、高速道路を一路南下する。台中で案内人の林さん（台湾には林さんが多くて困る。以下こちらをRさんとする）と出会い、警察に入山許可を貰いに行く。

嘉義を通り、山にかかる。阿里山である。なにしろ戦前の教育では、この辺りには生蛮という首狩り族が住み、家々には生首が飾ってあるのだ、というような有様であったから、愚かにも何となく緊張する。しかし、窓外の景色は急斜面を開いて、綺麗な茶畑が続き、茶の加工場もある明るい山村風景である。先入観念というものは厄介なものである。この茶畑は農業学者でもある李登輝総統が高地族を指導し開拓したものだ、と林さんが教えてくれる。

今夜は自忠という最終の集落での泊まりとなる。集落といっても五、六軒の家があるだけだが、何のためか警察の出張所がある。宿は民家の二階で、屋外のトイレなども案外に清潔である。（生蛮の話が消えないのだ）

翌朝マイクロで少し登り、海拔約二千五百米の登山口である。いよいよここからは歩きとなる。この辺りも工事中で完成すればかなり観光地化するであろう。ここまで道路もすべてきれいな舗装がしてある。

一山越えた塔塔加鞍部から山道となるが、緩い登り道に作られており息を切るようなところは少ない。また、道中八十数箇所という栈道が規格化された材料で完璧に作られてあってまことに歩き良い、はずであったが、どうも前夜飲まれた強いアルコールが悪かったか、ついに最後の五百米ほどは案内のR君に荷物をしよってもらう体たらくとなった。

とにかく三千五百米の白雲山荘に到着、まだ樹林帯である。日本の山小屋と同じような、蚕だな式であるが一番奥に等身大の観音様が祭っているのが、やはり異国である。同宿の若い中国人たちも熱心に拝んでいて、酒を飲んで騒いでいる我が方とは宗教心の差は歴然。

ところでまだ三月というのに、全く雪を見ない。事前の連絡では、ピッケル、アイゼン必携といわれ、荷物のいやな小生などは、命令に反して、軽アイゼンにストックでごまかすつもりであったが、それさえも不要の有様でリーダーが責められている。

しかし、こんなことは珍しいことのように、五月まで降雪を見るという。

翌朝はR君の命令一下、三時出発、頂上に向かう。前日から曇りがちであったが、今朝も深い霧で、ライトも曇りがち。路は相変わらず歩きやすく、雪も氷もない。頂上直下の二百米ほどに鎖場があるが、すがって登るほどでもない。

この辺りに漸く一塊の雪があって、またリーダーがからかわれることしきり。二時間ほどで頂上につき、ようやく明るくなってはきたものの、ガスで視界はゼロ。

頂上に何とか將軍という人の高い銅像があって西の方大陸を睨んでいる。あまり良い趣味とは思えないが、一説によると以前この玉山の高さが三九九七米といわれていたことがあり、あと三米足せば四千米となるところから、この大きな銅像を建てたともいう。現在は、三九五二米が決まりである。

早々に頂上を辞して下る。明るくなったところを見ても、まことに平凡な山道で、内地の三千米級とは較べようもない。山荘に戻り、荷をまとめて降る。昨日の登山口で待っていたマイクロバスに乗り、快適な山岳道路をさらに降る。今日は台湾最初の総統選挙の日で、休日になっている。投票を済ませたらしい人々が車で登ってくる。かなり大衆的な観光道路になっていると思われた。

帰り着いた台北も選挙で人が多い。選挙ポスターの代わりに色とりどりの小さい幟を町中に立てるので、非常に賑やかだ。山はちょっと期待はずれであったが、この地の歴史に大きく記念されるであろう時に、来合わせたのは面白かった。翌朝、起きて見ると昨日の幟が町中から、すっかり消えていたのはまことに見事であった。

アメリカ山歩き

石井 左右平

此の夏、七月末から五週間、アメリカで遊んで来た。娘が昨年春以来、シアトルに住みつき、ワシントン・アルパイン・クラブという山の集まりに参加して、あちこちの山に行き、そのリポートをして来る。非常に楽しそうなので、その誘いに乗って、彼女の家をベースにして、夫婦でいくつかの山歩きをして来た。以下はそのリポートです。

① アメリカ西部の山

アメリカの山といえばROCKYがまず頭に浮かぶ。が、どうにもアプローチが長いし、登山の良い対象ではない様に思われる。今年、ロッキーのアメリカの北端にあるグレイシャー・ナショナル・パークに行つて来たが、三千米級の山が連なっているが、見る山であつて登りたい気持ちを起こさせるようなものではなかった。山肌がかわいていて、北のカナディアン・ロッ

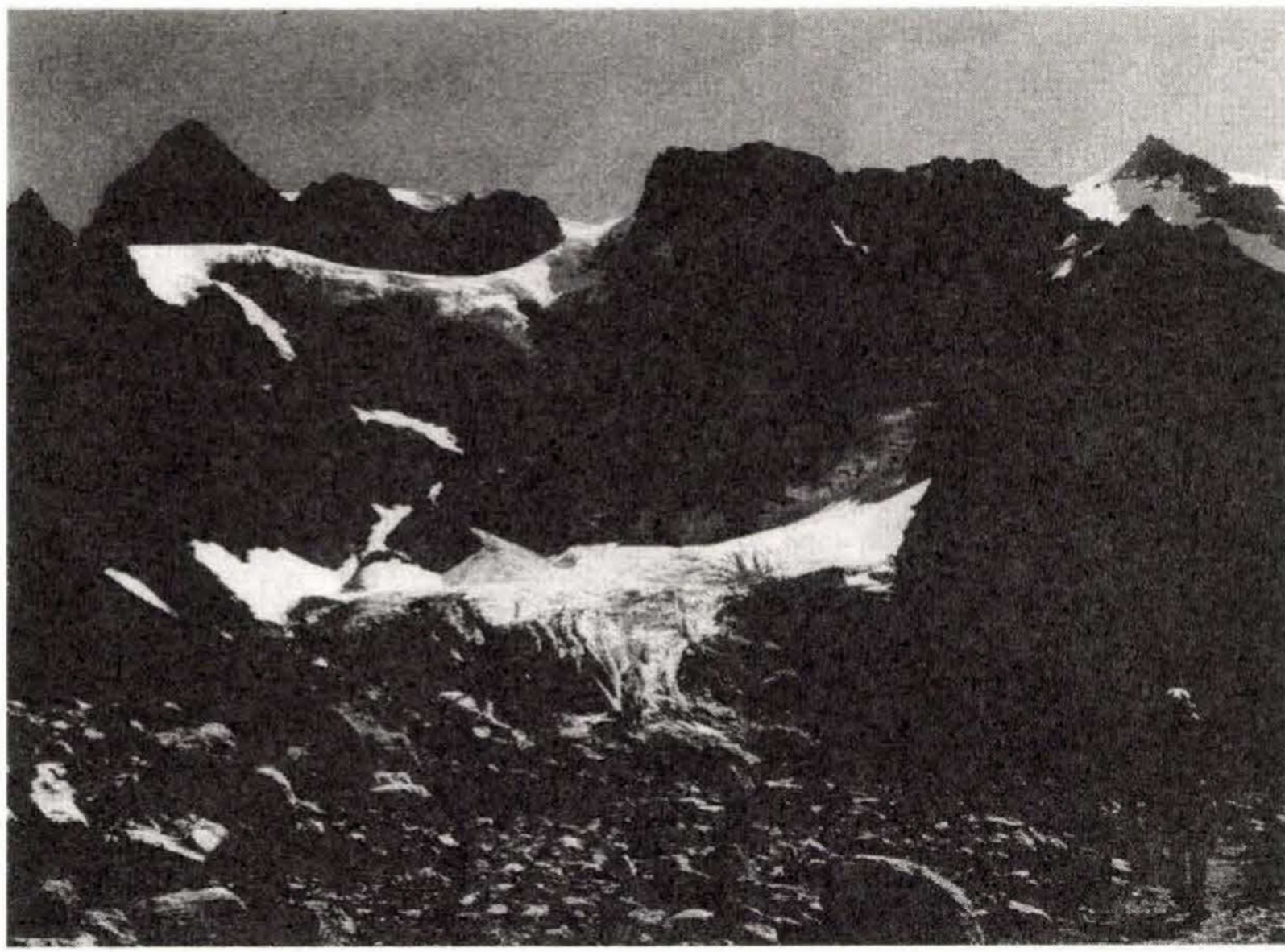
キーとは違うように感じた。もっとも二つの地域に行ったときの自分の年の差にもよるのだろうが。

これに対し、太平洋に近く、カナダのブリティッシュ・コロンビアからワシントン州、オレゴン、そしてカリフォルニア北部にわたつて一〇〇〇キロに及ぶ山脈を形成するCascade Rangeは極めて魅力的な山々をそのなかにいだいている。Cascade とは滝のことであり良い名だ。

カナダから南にアメリカに入って、すぐにMt. Baker (三二八五米) がそびえ、その東、又南にNorth Cascade の山々が大きなかたまりをつくっている。そして、シアトルから南へ直線距離で約九〇キロにカスケードの最高峰Mt. Rainier (四二九二米) がでんと坐っている。更に南、暫く行つてMt. Adams (三七四〇米) オレゴン州に入つてMt. Hood (三四二七米)

加州に入ってMt. Shasta (四三二七米)。此のあたりでカスケード山脈は終わる。そして、更に南に、Mt. Whitney (四四一八米)を盟主とするSierra Nevada山脈となる。

Mt. Rainierがでんと坐るといったが、その北にはそれ程高い山がなく天氣の良い日には、夏でもシアトルから白い素晴らしい姿がまるで丸見えになる。此の地域の日系の人たちは昔からタコマ富士と称して親しんできている。レニアもベーカーも登頂となると全く別だが、夫々の下部の域は周囲と多くのハイキングコースが



Mt. Shuksan

あり、シアトルからの日帰りが可能である。又、シアトルから細い海峡を渡って、対岸にOlympic National Parkがあり二四二八米の主峰として山塊をつくって居りこれもシアトルからよく見える。

此の様にワシントン州は、素晴らしい山々に恵まれた本当に緑の豊かな楽しい地域であることを今度知った。今まで随分シアトルに足を運んだが、仕事の話と、酒とゴルフで山のことは全く考えが及ばなかった。加州に長いこと居たが、WhitneyとShastaの途中まで行った位で、あとは殆ど山歩きと縁がなかった。加州は良い土地と言われるがこと山、そして流れ、ということになるとワシントン州には及びもつかない。シアトルには山の道具の専門店がいくつもあるがロスアンジェルスは勿論、サンフランシスコにも専門店はずいぶん無い。

② Mt. Baker 付近のハイキング

八月二十四日、朝早くシアトルを車で出る。ヴァンクーバーへ続く国道五号線(I-5)を北へ一三五キロ一時間十分でI-5を降りてハイウェー五四二を東へ行く。此の五四二号線はニックネームをMt. Baker Highwayという。田舎のハイウェーで追い越しが難しく、時間がかかる。此の道の後半四十分位は全く人家のない山の中の道である。最後に近くなって立派なレストランらしきものが三軒ほどあった。冬に

スキー客でにぎわうのであろう。それらと便所以外、建物は無い。大分上がってから

Mt. Shuksanがよく見える小さな湖があり、ここが写真の絶好の場所ということだ。Picture Lakeと称されている。シユクサンはこのあたりでベーカーにつぐ二八〇〇米程の雪と氷と岩のギラギラとしたコントラストを見せる穂高を思わせる良い山だ。都会から見える高い山々は大体英語の名がつけられている。

Rainier, BakerそしてAdamsなどはヴァンクーバーを発見したMr. Vancouverの部下とか友人の名をとっているがシユクサンは下から見えぬためでもある。インディアンの名がそのまま残っている。

ハイキングルートをTrailというのが今日の目的はLake Ann Trailシアトルから二三〇キロ、標高一四〇〇米の処に駐車。ここがTrailの出发点Trail Headである。時間は八時四十五分。二時間四十分程のドライブ。ここから先、便所が無い様なので、ここですませて置く。

暫く林の中を下って行く。下は山草が咲き、小川が流れ、シユクサンをのぞむ、こちらでMeadowと呼ぶ草地。このあと林に入ってゆるく登っていく。右手、大きな針葉樹の間にベーカーの真白な大きな姿が見えてくる。シユクサンはこの時間逆光だが、ベーカーはギラギラだ。人も少なく静かな気持ちの良い山路。林をぬけ

て指導標が立っていた。歩き出して一時間、はじめの指導標。右(南)へ行くとMt. Baker、左(東北)がLake Ann。こちらの指導標は方向を示すだけで、距離も時間も示していないのが多い。尚、此の指導標が此の日行きだった、たった一つの指導標だった。どの山に行っても極めて少ない。此の日の二週間前にベーカーを逆に北に見るSauk Mountainという一七〇〇米の山に行った。下のハイウェイからの入り口に見逃してしまう位地味にSAUK MTNとしてあったが、約三十分位車で上ったパーキングにはSaukも何もなく、ここからの登り口にただTrail Headとのみ書いた板がたてられていた。此の山の頂上にも何もなかった。然も頂上には我々二人だけ。眺めがすごいと案内書にあり、その通りだったのもSaukに違いないと思っっているが。

さて、さっきの指導標からLake Annに向かう。あとは登り一方。暑い。日本での山歩きよりのどのかわきがきつい。殆どの人が腰にプラスチックボトルをぶら下げている。吾々は更にリュックに予備を持つ。なにしろ山の中では売店などはどこに行っても無いと思わなくてはならない。先に書いたSaukの次の日、ノース・カスケードの中では眺めで有名なワシントン・パスという場所に車で行った。一〇〇台位は止まれるパーキングがあり、そばに小屋があつて

女性の ranger が絵葉書などの店番をしていた。となりに、誠に立派なトイレがある。ところがあるものはそれだけ。水だけはあつた。だから此の辺を車で見物する人も飲食物は持っていかなければならない。

寄り道が多いが、うしろ南にベーカー、南の稜線ごしにシユクサンの上の部分を見上げながら登る。大正生まれ二人、ピッチが遅くなる。この頃から登ってくる人が多くなってきた。キャンプをするのだろう、可成りの荷を持つ人がいるし、ピッケルを持った本格的な人もたまにいる。男ははだかが多い。誠に立派な身体でどんどん追いこして行く。少し前にあつたアトランタのオリンピックのことが想い出される。

漸く、Lake Annを直ぐ下に見る稜線に到着。

さっきの指導標のところが一五〇米、Lake Annが一五〇〇米。ここから二〇〇米程山の鼻をまいたところで突然シユクサンの西斜面というより壁がワツと目の前に立ちはだかつた。まるで涸沢をグッとアップにした様な状態、恐らく頂上から下部まで一〇〇〇米位の壁で、その間に三段の雪渓、一番下はブルーの氷河となつて落ちていく。この氷河まで吾々のいる所から地図では直線距離で一キロ少々か、暫くはだまって見ていた。

此の辺りに十張り位のテントがあつた。湖で釣りをする人、又シユクサンをを目指す人もいる



Mt. Baker

だろう。ともかく素晴らしい環境である。

此処で持参の菓子パンの如きもので簡単なランチ。こちらの人の山のランチはどうも極めて簡単な様である。中には歩きながら食べている人もいる。コッヘルで何かをなどというのは見ることがない。勿論、夜は違ふだろうが。四五時間位だと水だけぶら下げてという人も少ない。

今日は天気も良いし、男は一〇〇%ショートパンツ。何故か帽子をかぶる人は男女とも極めて少ない。娘の言うには、寒い時でもニッカー

ははかない。第一売っていない。本格的に登る人は夏のシーズン中、ショーツの下にタイツをはくのが男女とも主流らしい。ツエは随分使われている。

ついでだが、山歩きのあり方を色々分けている。今日の我々の様な trail 歩きは hiking。シュクサン、ベーカー等を目指すのが climbing。テントを持っていくのが hiking でも back-packing。尚、山で車の行かない、入れない部分が back-country。此の back-country でのキャンピングについては、下の方ではそれは trail-side-camping。もっと奥に入って cross-country-camping。

二〇〇〇米以上でのそれを alpine camping。そのそれぞれについて、許可が要るとか、何人までとか、どこまで厳しいかは知らないが、規定が一応ある様である。この様に色々の言葉が使われているのは、山歩きが非常にポピュラーになりつつあることを現すのだろう。

さて、来た道を引き返す。午後一時頃で、大人が増えてきた。ゾロゾロということはないが土曜日で天気も良く、夏休みの終わりである為もある。こちらの山でよく会って感心するのは、子供を背負って来る人が結構いることである。今日も何組か居た。中にはベビーをおぶって登ってくるミセスもいる。大したものがある。

雲一つない青空の下、山と樹にかこまれた楽し

い一日だった。三時半頃パーキングに戻り、高速をとばして七時過ぎにシアトルの家に着いた。

③ 注意書きのこと

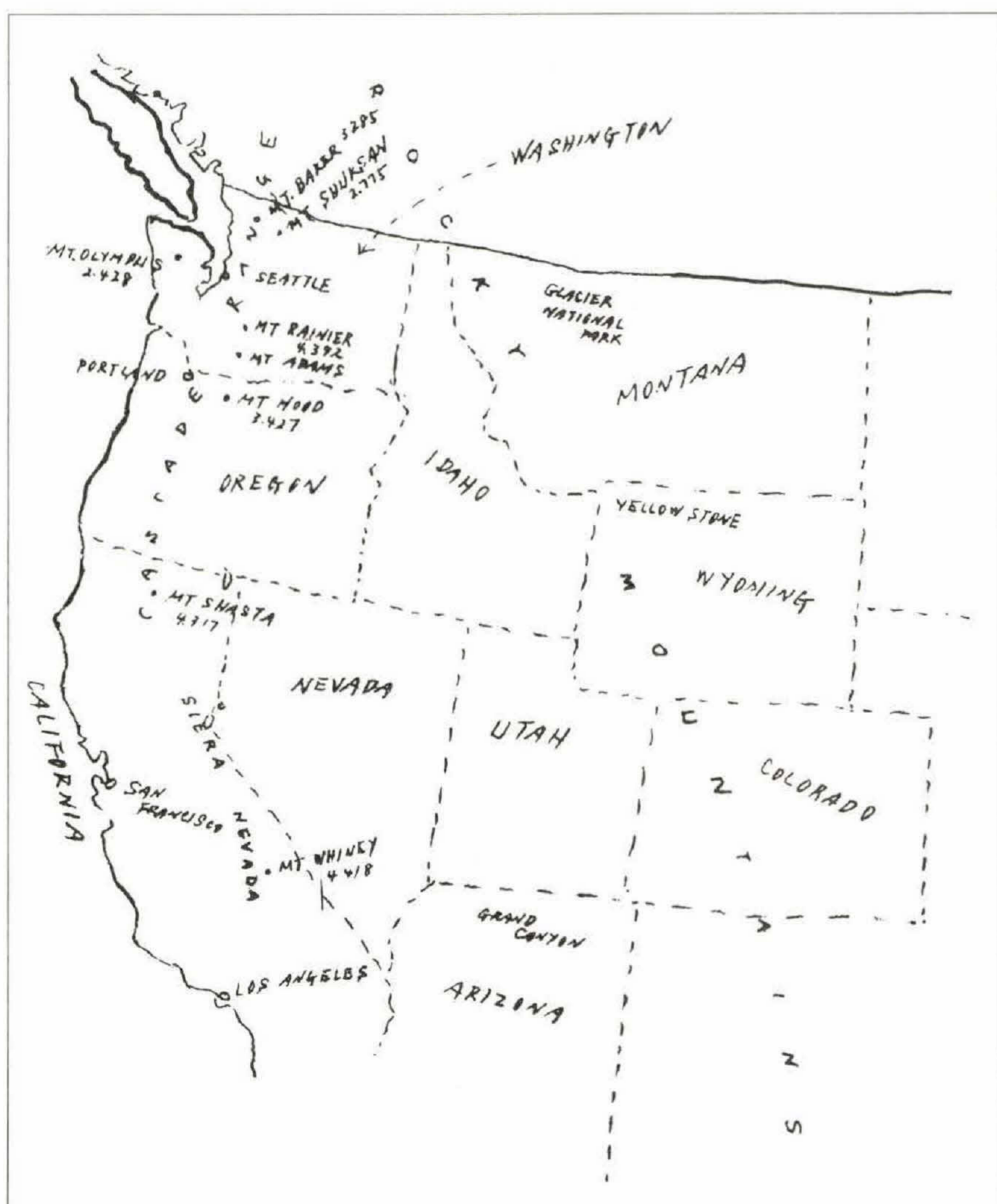
レニアの基部にホテルや ranger station のあるパラダイスという場所がある。

標高一六〇〇米位。このあたりを Paradise Park といって、遊歩道が広範囲に出来ている。このあたりでは、ここに入るな、草をとるな、動物に餌をやるな、と可成りの数で注意書があった。ここはバスも多く来る観光地のせいだろう。然し、いったん trail に入ると

もう何も無い。上に書いたベーカーでもどこでも殆ど注意書は見なかった。あるとすれば no pet (national park は駄目) とか自転車は駄目といった法的なこと。面白かったのは、モンタナのある山の trail head に釣りは三匹まで、と注意書があった。これをどう解すべきなのか。釣って水にもどすのはどうなのか。

又、トレイル用の地図がある。私企業の発行のものだが、その裏に色々の注意書がある。例えば「食器は

キャンプで洗え。湖や流れで洗ってはいけない。」「折りたたみ出来るバケツを持って行け。より大量の水をキャンプサイトに運べるし、それによって水場への往復が減って新しい踏みあとをつくる機会を減らせる。」「衣類や道具は earth color を選べ。派手な色は natural views に impact を与えるし、人の存在を強調することになるから。但し非常用は別」「木を燃やしてはいけない。ストーブを持参せよ」等々御丁寧なことが多い。概してキャンプに関すること



が多いが、その一つの理由に山小屋がないことがあると思う。例えば Mt. Rainier。四四〇〇米近い山頂までに約三〇〇〇米の高さで南側、北側に一つずつ小屋があるらしい。が、いずれも ranger 用の小屋で非常の場合以外、一般の人は使えない。ベーカーもシュクサンも何もない。だからちょっとした山に行くにはテントを持って行くのが当たり前となる。この高い山に登る (mountaineering) については、こんな規定も一応あるらしい。「経験者は ranger に予めレジスターすること。経験者でも単独行は superintendent の許可を要する」又「一八才以下のクライマーは両親又は保護者の書面による許可をそえて ranger に届けねばならぬ」こうしたこと、どこまで守られているのか、又本当に must なのか否か詳かにしないが、環境保護については可成り忠実なように思われる。又、片道一時間位の trail で車イスでも行ける様にしてある道があり、色々感心させられることがあった。

最後に山を歩く人はどこでも本当に良い顔をした人ばかりだ、と今度もつくづく感じて帰ってきた。

華山に登る

横山皖一

八月のヤンゴン行きを前に机を整理していると古い記録が出てきました。

九年も前の余り参考にもならない山行ですが、皆さんに経験のない中国の山登りなのでご紹介することにしました。

中国五岳(注)、泰山(東)、華山(西)、衡山(南)、恒山(北)、嵩山(中)で一番険しい山の陝西省・華山(海拔二、二〇〇米)には是非登りたいと考えておりました。ご承知のように当時の中国における個人旅行は、切符購入、外国人の立入禁止区域(未開放地区)などと困難が多く、滞在二年目の六月(一九八七年)にやっと登ることが出来ました。

(交通関係)

南同蒲線(大原―西安)の華山駅が最寄りの駅となるのですが、一日一本の普通列車が止まるだけで私の住んでいた運城から一二四K、四

時間、午後一時一五分に着くのです。この線には他に急行二本と特急一本が走りますが華山には止まらないので、手前の急行停車駅、孟原(海拔三〇〇米位)からバスを利用することにしました。

学生三人と共に運城発午後五時二一分発の汽車(中国語で火車)、孟原着八時一〇分の急行の硬座に乗りました。料金 一人三元(約一二〇円)

風陵渡を過ぎると汽車は黄河を渡りますが、黄河は見るたびに変わった顔を見せて、前回の三月の時とは大変わりでした。孟原の駅前是他の処と同じように大勢の人でごった返し、方面別のバスの車掌が大声で客を集めています。私は露天の中華ソバ屋で腹ごしらえ、ラーメンは一人前六毛(約二四円)でした。

学生に先生は「日本語も中国語も使わないで下さい」と言われ、学生たちが車掌と話合い、

一人八毛(約三二円)で交渉成立、バスに揺られて三〇分で華山に着きました。(外国人は倍以上の料金が請求されるのです。)

(登山の始まり)

バスの終点から駅の方へだらだらとした登り坂で両側には木賃宿、売店、茶店などが並んでいます。約七〜八分歩いてこの突き当りに玉泉院と言うお寺があり、この前で大勢の人が準備をしています。運動靴を借りる人、電池を買う人、帽子を選ぶ人、杖を手取る人。私達も缶ビール(いつものように生暖かいおカンビール?)を一本づつ飲んで出発することにしました。

登山はこれのお寺を通り抜けることが必要で一人二毛(約八円)を取られ、出口の華山登山口で一人一元(約四〇円)を入山料として取られる仕組みになっています。ここの出発は午後一時四〇分でした。

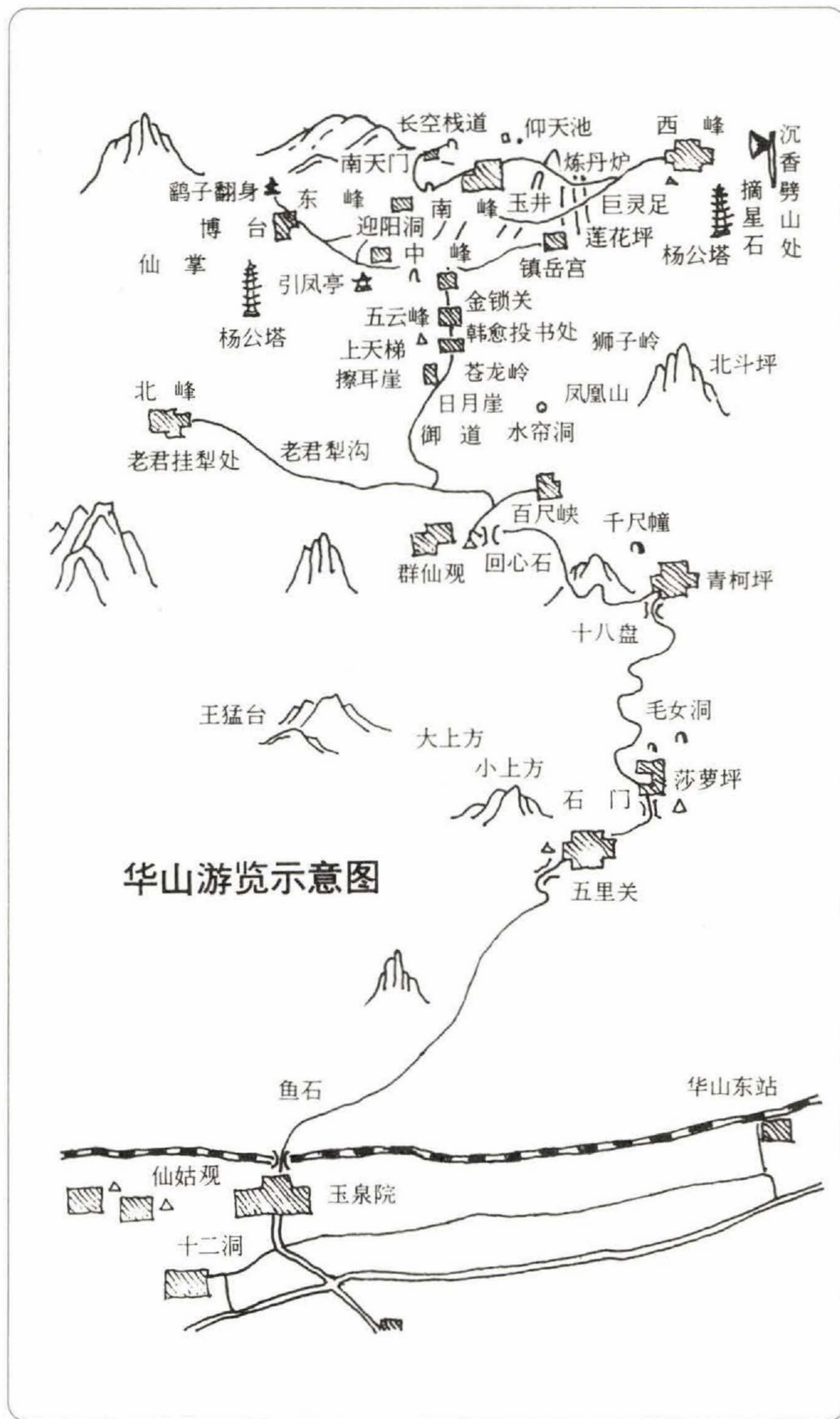
なお、この登山路はほとんど日陰のない石の階段なので夜に登り、頂上で御来光を迎える人達が大部分のようです。

登山口からは五米幅位の石畳のだらだら坂で、懐中電灯を頼りに登っていると前方の闇の中に蛍火のように懐電が揺れています。こんな石畳が三〇分も続くと石の階段に変わりました。登っているときは分かりませんが、全山が花崗岩から出来ており、道はすべて岩に刻んだ階段です。処により道は幅一米位の傾斜した高さ三〇〇米

位のチムニーの中などに入り、側面に付いた鉄鎖と刻まれた足場だけが頼りです。こんな処に来ると人が溜まってしまふので、前の人の足元、背中を懐電で追うことになります。また、傾斜七〇度位の一枚岩、幅五〇米位、高さ二〇米位なども現れます。鎖は二本しかなく、足場の刻みも二センチ米位なので待ち時間が多くなります。

ワンピッチに一時間歩いて、一〇分の休み、次に一時間歩いてから一時間の仮眠を取り、そ

れから二ピッチで北峰への分岐点にきました。そこには小さな小屋(約五坪)があり、中にはいっぱいになって人がマグロのように寝ていました。小屋の前にも沢山の人が休んでいます。あまり早く東峰に着いても御来光までの待ち時間が永くなるので私達もここで軽く食事を取り、また一時間の休止としました。こんな時は日本から持参の尻皮が大いに役に立ち、テルモスの一杯の番茶は元気を与えてくれます。





この分岐点からは岩の稜線に刻まれた階段を登って行きますが、道は狭くなって夏の富士山に登るように人の行列です。道の両側には大勢の疲れた人達がぶっ倒れていました。道が森林帯に入ってしまったらと東峰の朝日台で一〇〇人以上の人が座り込んでいました。着いたのは五時五〇分、御来光の六時三五分を楽しみに

震えながら待ったのですが、東の方角が少し明るくなっただけで曇り空。写真を取ると私達はそこを後に東峰へ向かいました。登り口は一枚岩のスラブで傾斜は八〇度位で一部分は軽いハングになっていましたが例の通り二センチ米位の足場が切っており、鎖を頼りに腕力で登ります。登りきった頃から丁度ガスが湧いてきて、もう何も見えなくなりました。記念塔があり道はガスの中に消えておりましたが、私達はそこから引き返すことにしました。先ほどのスラブを降りきった頃にはガスは霧雨と変わり、しばらく様子を見ていると小雨となりました。計画では西峰にも回るつもりでしたが、写真も絶望なので諦めて下山することにしました。

途中で小さな茶店に入って缶詰の豚肉を固形メタを使って携帯用のフライパンで暖めブランチを取りました。学生達はまんとうだけなので豚肉を喜んでいました。お茶代は四人で十分飲んで六毛(約二四円)でしたが一元を渡し、お釣りは店のおばあさんに上げてきました。

登るときは暗闇の中を一步一步登っていたのですが、石の階段を降り続けていると足のバネがだんだんと変になってきます。狭い処でボツカが登って来ると少し休めるのでやれやれと言った気持ちになります。こんな繰り返しの中の間に雨は上がり、写真を取ったり、北峰への往復を終えてまた石の階段、チムニー、ス

ラブを降ります。階段が終わって石畳になった頃は、足はがたがたでした。

やっと振り出しの玉泉院に戻り外に出て緩い坂道をぶらぶら歩いていると大粒の雨がポツポツと降り始めました。坂の下に止まっているマイクバス目掛けて走り、飛び込むと同時にザーッと大降りになったのです。来るときは三〇分位でしたが交通渋滞で一時間以上掛かり孟原の駅にたどり着きました。駅前の広場は泥の海で駅の待合室は人で身動きも出来ない状態となっていました。

孟原発一五時三六分―運城着一八時〇六分
後で調べてみますと中国の五山はすべて信仰、宗教の対象だったため階段で登る山なのですから登山の対象にならないことが分かりました。

(注)五岳は人により衡山↓黄山、恒山↓峨眉
山、嵩山↓廬山などに変わりますが泰山と華山は変わりません。

コースタイム

登山口 09:10 時 4:00 分 ― 小憩 1:15 時 3:00 分
/ 1:15 時 4:00 分 ― 仮眠 1:15 時 3:00 分 / 09:15 時
4:00 分 ― 北峰分岐 2:15 時 3:55 分 / 3:15 時 4:55 分 ― 朝
日台 5:15 時 3:00 分 / 6:15 時 4:00 分 ― 東峰記念碑 7:15 時
00 分 / 7:15 時 2:00 分 ― ブランチ 7:15 時 3:55 分 / 八
時 00 分 ― 小憩 1:00 時 1:55 分 / 1:00 時 3:00 分 ―
登山口 1:35 時 3:55 分

台湾最高峰

玉山主峰に立つ

上原利夫

富士山(三七七六米)より高い山に初めて登った。明治天皇から新高山という名をもらったという玉山(YUSHAN)で、標高は三九五二米。しかし当時から三九九七米とされ、一九八三年に「于右任先生記念銅像」が建てられて、四〇〇〇米とした山である。一九六五年五月二七日(土)に登頂した。

台湾の高山地帯に入るには、台湾省警務処から入山許可証をもらわなければならない。外国登山隊(四人以上)のために、中華民国山岳協会が入山許可交付の申請をするが、条件として一隊(四人以上一人以内)につき一人のガイドをつけることになっている。

毎年五月下旬の日本ダービー開催日が晴天であるというので、出身高校山岳部OB会の山行がある。F君が出張時に手続きをしてくれ

るので、五人の玉山登山隊を編成し、五月二六日(金)朝羽田発の中華航空機に搭乗した。

三時間弱で台北の中正機場に昼前に到着し、山岳協会李剛龍理事の出迎えを受けた。ガイドの林哲全さんの案内でチャーターしたマイクロバスで台中の警務処へ。バスにはガイド見習の郭素秋さん(女性)が乗り、別の小型車で三人の台湾OLと仔犬一匹が同行した。一〇人のパーティである。

途中苗栗のカフェテリアで昼食をとり、台中警務所へ着く。林さんは私達からパスポートを預かり、手続きした。五〇分かかった。一五時一五分に出発し、石棹で夕食一時間。民宿のある自忠に到着したのは一九時四五分だった。正味五時間三〇分のドライブ。南国のバナナ畑の次は茶畑と変化が楽しかった。

自忠の民宿では、玄関上の天井の低い二階の一室で、一行の一〇人は雑魚寝した。翌朝夜明け前の五時にマイクロバスで出発した。民宿の朝食のおかゆがおいしかった。玉山登山口の東楠山荘より更に塔々加鞍部(二六八〇米)までバスを乗り入れてもらった。

五月二七日(土) 天候は快晴。台湾は梅雨期だったが、運よく晴れたのである。五時四五分に鞍部を出発し、六時三〇分三〇〇米地点の無人休憩所に着く。ここが亜熱帯林と温帯林の境界になっている。登山道はよく整備され、五〇〇米おきに立派な道標が建てられている。ハイキングの気分であった。しかし右手の谷間は一気に切れ落ちており、さすがは高山らしく向かいの尾根や谷間の岩肌が荒々しい。白木林展望台からは急登になるが、栈道は太いパイプで補強され、切戸には同じパイプで橋が作られているため、緊張しながらも順調に高度を上げていく。一〇時四五分排雲山荘(三五二八米)に到着した。

玉山には昼過ぎから雲が湧くとき。しかし明日の天候がわからないし、明日の夕方台北から帰国する隊員もいるので、今日中に頂上をきわめることとした。昼食後一二時一五分に空身で出発。空気が薄いのでゆっくり歩く。山荘のすぐ上が森林限界で、全く異なる山容になる。ガレ場で道がわかりにくくなる。一四時三〇分

日本の一等三角点(三九九七米)にたどり着いた。回りはガスに巻かれてしまい、眺望が効かなかった。それでも感慨は大きい。右任という中華民国首相の銅像の下で記念撮影し、満足満足。

排雲山荘に戻ったのは一六時だった。大勢(七〇人位)の大学生が着いていた。二段になった寢床であるが、私達一行は貴賓室でのんびりと過ごせた。素性の知れなかった若い女性と英語、日本語、中国語を混ぜて会話がはずんだ。OLは台北の旅行社に勤め、一人は添乗員で日本も知っている。ガイド見習は、台北大学大学院生で考古学専攻とか。自炊の小屋で日本勢はカレーライスを食べた。彼女達はインスタントラーメンを食べていた。

五月二十八日(日) 四時起床。満天の星を眺めることができた。南十字星は見えない。五時二〇分山荘を出発し、塔々加鞍部へ戻り着いたのは八時四〇分だった。マイクロバスが待つ東楠山荘のある登山口着九時五〇分。観光客らしい家族連が大勢来ている。黒松が美しい姿で見てたえがある。観光センターの玉山展望台に立ち寄って、玉山を眺めて満足。草屯で昼食時一行で円卓を囲んだ。一六時に台北国際空港中正機場に戻り、帰国する二人と別れて、台北のホテルに入った。

台北の街路はスクーターの二人乗り、三人乗りで溢れている。今や日本では見られない略さ

ない漢字がとてなつかしい。読むことは出来ても書けない字も多くなっている。仮名がないので外来語の表示も独特である。台湾の人は親日的である。総督府の建物も大切に使っている。

北海道・幌尻岳と東北の山々

はじめに

この紀行文は、九六年七月から八月にかけての十日間、東京から車で北海道を往復し、幌尻岳と東北の山々を登頂したときの記録である。高橋車に上原を乗せ東京を七月二十六日(金)午前五時に出発、二十七日(土)秋田駒ヶ岳を登って、二十八日(日)早朝千歳空港で有賀を迎え、二十九日(月)幌尻岳登頂。同日夕方札幌で小野(昭昭)の歓迎を受ける。三十日(火)に戻った。

今回の共同山行は、前年十二月の針葉樹会(於 如水会館)で偶々三人が近くに座ったのが縁で纏まった。北海道にある百名山九座のう

翌日山岳協会の事務所へお礼の挨拶に行ったが、誰にも会えなかったのは残念だった。故宮博物館を見学して帰国した。(一九九六・七・二五)

上原 利夫
有賀 盈
高橋 信成

ち二つを残す高橋にお世話になることにした。有賀は小樽で生まれたものの、三歳からは東京生活で、北海道は初めてと言う。上原は九一年夏に羅臼岳、利尻岳を登って以来、北海道が好きになり、冬の網走で流氷も観たが、山の機会を待っていた。

幌尻岳(二〇五二米)は、日高山脈の最高峰でありアプローチが長い。深田久弥が登った新冠川ルートもあるが、幌尻山荘が建てられてからは額平川ルートが一般的。いずれも徒渉はつきもので、登りは急勾配、結構タフな山である。例年なら七月下旬の北海道、東北地方は夏晴れであったろうが、今年は梅雨期のようであった。

五里霧中の山登りは気が散らなくてよいが、眺望がないのは無念である。しかし温泉があった。以下は各人の山と温泉と友情の記録である。

(上原記)

◎ 幌尻山荘まで (七月二十八日)

千歳空港から車で平取(びらとり)を経て岩知志ダム管理事務所へ向かった。途中義経神社を参拝し鉄道記念館もみた。北海道電力の小野が予め送ってくれた地図を頼りに管理事務所は到着できた。電力会社の林道のゲートを開ける鍵も連絡されていたのですぐ借りられた。ゲート前には車が十数台置いてあった。一般車はここから歩かなければならないが、我々は借りた鍵でゲートを開き車を進めた。途中夫婦らしい二人づれが歩いておりてきて「増水してここまで濡れてしまいました。」と上着を開くとポロシャツの胸の上まで濡れていた。別にあつたひと「十七回徒渉がありました。」といていた。二、三日前から降った雨のため増水しているらしいことがわかったが、心配しながらも先へ進めた。取水口で車を降りる。ここからは山荘まであるかなければならない。上原さんは用意周到で半ズボンにタイトのような長いものをはいて準備完了。有賀さんと高橋は、翌日濡れたズボンとなると困るので別のズボンをはいた。地下足袋、草鞋をはいて出発。途中

営林署のひとのグループに会い山荘の利用料一人千円を支払った。徒渉は、腰のあたりまで水に浸かるころが多かったが胸まで濡れる箇所も二、三あった。写真の徒渉は比較的余裕のあるところであったが、余裕がなく三人で手を繋いで渡ったところもあった。約二時間歩いて幌尻山荘に到着した。

山荘は、ツアーグループもおり二階まで満員であり台所に寝ることとなったがなんとか足を伸ばして眠れた。

(高橋記)



◎ 幌尻岳登山 (七月二十九日)

午前二時起床。他のパーティは未だ白川夜船なので出来るだけ物音を立てないように身支度を整え小屋の外に出たら、暗闇に雨が降っていた。途端に戦意喪失だが先に出ていた高橋は既に雨具もつけて準備万端怠りなく、その気迫がこちらの弱音を口の中で消してしまった。後から出てきた長老の上原さんとは見ると悠然と準備を続けていて、雨など意に介していない様子。二時四十分ライトを点けて小屋をでた。

道は小屋の左手から樹林の中に入り急坂が続く。三十分も歩くと沢の音は聞こえなくなりただ激しくなる雨音を聞きながら黙々と泥道を登るのみ。実は二日前に急に下痢に罹り、懸命に此の二日間絶食に努めた結果、何とか治ったものの、体力が回復していない為か先頭に行く高橋のペースに追いつかなくなりスローダウンして貰う。小屋を出て一時間半位で尾根筋にでたが雨雲が垂れ込めて薄暗く何も見えない。

四時半生命の水に到着。尾根を下った所に美味しい湧き水があるとのことだが、今は飲みにくい気にもならずひたすら登り続ける。暫く岩礫の尾根をいくと広大な(と思われる)お花畑に出た。此処までくれば晴れていれば此のお花畑ばかりでなく幌尻の頂上や初めての生まれ故郷の山々の眺めが楽しめる筈だが、残念ながら視界はゼロ。休憩もそこそこに先を急ぎ六時半

幌尻岳頂上に着いた。此の後戸蔦別岳を登るコースを経て小屋に下る計画であったが、雨は止む様子もなく何も見えないので頂上に五分間居ただけで来た道を下りた。九時小屋に到着。

(有賀記)

◎ 札幌の夜 (七月二十九日)

下山して、日高町の沙流川温泉を道路看板で見つけた。高橋運転手以外は濡れ衣のままであったので、入浴後は着替えてさっぱりした。眺めのよいドライブを楽しんで、午後七時過ぎ「中殿ホテル」(南一条西七丁目)に着き、小野君の出迎えを受けた。有賀と私は初対面であったが、高橋は三年連続である。ホテルの女将と旧交を暖めている。小野君推奨のスペースにゆとりがある清潔なビジネスホテルである。上品で親切的な母娘がフロントに立ち、行き届いた家族的サービスをしてくれる。私達は濡れ衣を乾かしてもらった。

小野君は東京出身であるが、山好きで就職先に北海道電力を選んだ。夏は山で七十日、冬はスキーで五十日を過ごすという。空腹の私達はしゃぶしゃぶの食べ放題でご馳走になり、札幌らしく最後はラーメンの煮込みで仕上げた。そして二次会へ。ススキノの山の仲間が集まる「ラリーグラス」へ案内された。十二人ゆっくり座れる低いカウンターの向かいにはママやホステスの笑顔やおしゃべりがある。驚くべし、壁

には故大塚武先輩直筆の油絵が三点も飾ってあるとは。ヒマラヤ地方を描いた丹精な絵であった。ママもヒマラヤ方面に五回旅行したとのこと。

針葉樹会員で大塚先輩の絵を鑑賞した人は何人いるだろうか。会報で紹介してはどうだろう。次々と来店する客は楽しそうに話す。月曜日の夜というのに盛況であった。私達は今朝二時に起きて雨の中を幌尻岳に登ってきたので、小野君と別れてホテルへ戻った。針葉樹会報に北海道の山のこと、北海道に住む会員の消息、北海道への思い出などを特集すると面白いと思う。

ラリーグラスのママも一文を寄せてくれるかも知れない。
(上原記)

◎ 秋田駒ヶ岳 (七月二十七日)

前日黒湯温泉に宿泊し、上原さん・高橋で男岳・女目(おなめ)岳に登頂した。ガスのため視界ゼロ。

◎ 八甲田山 (七月三十一日) 有賀・高橋

七月三十日夜室蘭をフェリーで出発、三十一日早朝青森着。車で酸ヶ湯温泉までいき、大岳山に登り、帰りは、毛無岱を経て酸ヶ湯泊。

◎ 岩木山 (八月一日) 有賀・高橋

リフト終着駅から歩くこと三十分で頂上。雨。有賀さんと大館で別れた。

◎ 鳥海山 (八月二日) 高橋

前日鉢立山荘泊。九時十五分頂上着。途中の大物忌神社の神主が「十日前に入ったが、これまで一度も晴れなかった。」と言っていたというが、快晴に恵まれた。頂上では、地元も高校生らしい十数人のグループと一緒に、スイカのお裾分けを受けた。

◎ 月山 (八月三日) 高橋

五時五十分八合目中の宮参籠所出発。頂上八時。ガス。

◎ 西吾妻山 (八月四日) 高橋

天元台のペンションを出て、リフトに乗る。十時三十分頂上。その日のうちに東京へ帰る。



春の未丈岳

藤本敏行

四月中旬のある日、前神、兵藤の二人と久し振りに「峰」で落ち合い酒を飲んだ。連休にどこかへ行こうという前神の発意で、その為の打合せが目的である。厳しい山登りからはすっかり遠ざかってしまっているが、前神のように誘ってくれる友人が居るといのはまことに有難い。もう十年近く一緒に登ってはいないが、このメンバーならそのブランクによる違和感はない。さて、どこの山へという段になると、各々思い入れのある山の名が次々に出てくる。要件は早朝に横浜を出発して四十八時間以内に帰ってこれる山、山中で泊まる必要がある山、雪はたっぷりなくてはならない、行ったことのない山ならなお良い、という次第で、案外簡単に奥只見の未丈岳に決まった。

さて四月二十七日、ベトナムに転勤が決まった兵藤は結局参加を取り止めた為、前神と二人で横浜を出発。沼田付近では谷川岳の双耳峰を

望見して少し興奮したりしながら、関越道を快調に飛ばし、昼前には小出の商店街で酒と食料の買出しをしていた。前神は相変わらず（二十年前と殆ど変わっていない）さつまあげやら何やら妙なものを大量に買い込む。ここで漸く地図を手に入れ、登路を検討する。奥只見ダムのダムサイトにあるスキー場から丸山を経て尾根伝いに目指すのがもっとも容易そうであり、議論もなくルートは決定。

シルバラインの長いトンネルを抜けると快晴で眩しい程の奥只見ダムに到着した。丸山スキー場の駐車場に車を停める。サングラスを忘れてきたことに気付いて、スキー場の売店でひとつ仕入れる。便利なものだ。リフトを乗り次ぎ一番上まで登り、後は適当な所まで歩いて泊場を捜すことにする。それにしてもスキー場は大賑わいだ。上越線沿線のスキー場があらかた店仕舞いをするこの時期に、恐らくハイシーズ

ンを迎えるのがこの雪深い奥只見のスキー場なのであろう。短いシーズンに思い切り稼がねばペイしない筈だなどと思いながらリフトで高度を稼ぐ。

リフトの終点から一步でも遠ざかると今も昔も相変わらず、ゲレンデの喧嘩はうそのように静かになる。カンカン照りの下、腐った雪の行進が始まる。上から真っ黒に日焼けした三人連れが降りてきた。環境調査会社の社員で仕事でこの山域に入っている由。羨ましい職業ですねと言ったら、ヘドロの海に潜ったりで面白いことはありませんよとの答が返ってきた。昨日は未丈へ続く稜線上を熊が歩いていましたよ、と教えてくれた。

ゲレンデの続きの広い斜面は、間もなくやせた尾根に変わる。雪が切れ灌木の出ている箇所もあったがさすがに積雪は多い。次第次第に山奥という実感が湧き上ってくる。一時間強程歩き、雪の小さなドームに着いた。その先は樹林の中を尾根が落ち込んでいることもあり、気持ちの良いこの小さなてっぺんに泊まることにする。テントを張り、夕暮れまでのひと時を外で過ごす。風は少し冷たいが素晴らしい天気だ。西に越後駒が大きく、その南には懐かしい荒沢から花降へと続く稜線が手に取るように望める。さらに南は平ヶ岳や尾瀬のこれまた懐かしい山々。東は会津駒から窓明、丸山と会津の山々が呼べ

ば答える近さで連なっている。大学の最後の三日にやはり前神と二人で大湯から駒に登り、中ノ岳を経て十字峽に降りたことがあったが、そうしたひとつひとつの山行の記憶が甦ってくる。その三月の中ノ岳では頂上小屋が某大学山岳部で満員だった為、吹雪の中、頂上直下の狭いスペースでツェルトに泊まりひどい一夜を過ごした、などとすっかり忘れていたことを前神が思い出させてくれる。至福の時間——シルバレーインなかりせば、朝の八時に横浜を出て夕方の五時にこのような場所で、このようなひと時を過ごしているなどということは到底不可能だ。寒くなってきたのでテントに入り、ちゃんと米を炊き、野菜を切り、カレーを作る。酒を飲み、いつもの様にグダグダ話している内に眠ってしまった。

夢うつつの中で、雨が降り始めたのが判った。その内に稲妻と雷鳴が始まり、完全に覚醒するのに時間はかからなかった。凄まじい稲光りだ。シュラフに潜り目を閉じていても、明るくなるのが判る。時刻はまだ十時半。樹林帯から少し頭を出したドームの上、テントの隅はピッケルで留めてある。生きた心地もしいと言えればオーバーかも知れぬが、冗談じゃないというのが偽らざる心境。雨も激しく濡れねずみで動く気もしない。朝の天気予報で所により雷雨といったのを思い出して、夕刻の好天を良いことに

こんな無防備な場所にテントを張ってしまったことをかすかに後悔しつつ、ひたすら耐えた。その内に雷鳴は遠ざかり、それを知覚するかもしれないかというタイミングで再び眠りに落ちた。

翌二十八日は霧の中に明けた。視界は二〇メートル程。きつとガスは上る、まさかまた雷がくることはあるまい、と樂觀して七時半、軽装で出発。十分程下った所でサングラスをテントに忘れてきたことに気付き引き返す。どうも雪山の基本をすっかり忘れてしまったようだ。雪は昨夜の雨ですっかり腐り切っているが、幸い四月も末、それ程もぐりはしない。細くなった尾根を西へ辿り、所々北側の山腹をトラバースしながら距離を稼ぐ。確かにいつ熊が出てきてもおかしくない程、山深い場所に居る訳で、そのこと自体がうれしい。

未丈へのルートは、一旦西へ進み、日向倉山からの尾根とのジャンクションで北へ向きを変え、高低差はあまりない尾根通しに登るようになる。昨日観察した限りではジャンクションから先は結構大きな雪庇が東側に出ている稜線の様だ。

割と長いトラバースの後ひとしきり急な登りがあった、雪のピークへ出た。この頃からガスが切れ青空が拡がり視界がきき始めた。北を見ると大きくなった未丈が間近にそびえている。漸くジャンクションに達したという訳で、休み

をとり眺望を楽しむ。未丈岳の後方はるか北には浅草、守門とおぼしき山々が姿を見せ始めた。四方が山また山、大きな町はあの越後三山を越えた上越線沿いまで出ないと無いのだと思うと、それだけでも今日山に来て良かったと思う。

雪庇が切れて若干いやらしい箇所に出くわしたが、再びすっかり晴れ上がった中での単調な稜線歩きには丁度良い刺激になる。誰も居ない、静かで、穏やかで、でも日射は強烈だ。素晴らしい春の山になった。広くなった尾根を辿り、藪をひと漕ぎして、後は緩い斜面を登り切ると未丈岳山頂だった。十一時着。どこかの山岳会のプレートが如何にも奥只見の藪山という感興を醸し出している。まだ歩いたことのない大鳥岳から毛猛へと続く稜線がなかなか魅惑的だ。二泊三日位で行けるかも知れないなど思ったりする。学生時代に結構な日数を費やした奥利根や会津の山々は、もしかするとやはり一生懸命に登った穂高などよりも、僕にとってはもっと親しい山々かも知れないと考えたりもする。一時間を山頂で過ごし、すっかり満足して帰途についた。

下りは早い。二時間でテント場に帰着。再び少し重くなったザックを背負い、またテクテク歩いてスキー場へ。下りもリフトを使い三時頃には車に乗り込んでいた。

アリューシャン列島

シシャルディン峰登頂記

石川保典

日本山岳会東海支部が昨年六月から取り組んでいる「環太平洋一周地球環境調査登山隊」に、後援している中日新聞本社の同行記者として、アリューシャン列島の最高峰・シシャルディン（二八五七米）に八月、登頂した。雨風と霧に悩まされた北辺の地の登山を報告する。

日本人メンバーは、隊長の稲葉省吾（五）、小川務（五）、筆者の石川保典（三）、篠崎純一（三）の四人。八月五日、名古屋空港をたち、ソウル、アンカレッジ経由でダッチハーバーへ。同峰があるウニマク島は、アリューシャン列島の東端。機上から見た富士山に似た美しい円錐形の容姿はその後、何日も嵐のような厚い雲の中に隠れた。

夏だというのに曇っていると肌寒く、気温は

五、六度にしか上がらない。ダッチハーバーで、

ガイドに雇ったアリューシャン在住の米国人、スコット・クー（四）と、ポーター役の高校一年生、個人的研究で来たアラスカ州立地質研究所の火山学者の三人と合流した。ウニマク島は冬、海が氷結して陸続きになるため、アリューシャンでは唯一、熊のグリズリーが生息する。体長が四米にもなり、性質も荒い。ハンターでもあるスコットは、ガイド兼用心棒でもある。アメリカ人三人がライフル、ショットガン、マガナム銃を携行した。

水上飛行艇をチャーターし、七日夕、ウニマク島のラグーン（池）に着水、上陸した。湿原を歩き午後十時、ベースキャンプを設営した。トリカブトが茂り、克蘭ベリー（つる苔桃）



機上から見たシシャルディン。
噴火口からわずかに噴煙が見えた。

のかん木の茂みが広がるクリークのわき。標高四〇米。日没は午後十時半と遅い。

BCからキャンプを二つ伸ばした。アタックキャンプを張ったのは、標高一〇〇〇米のモレーン上。一人あたりの荷物は三〇キロをゆうに越え、二日間、苔でふかふかした溶岩台地を、熊避けのホイッスルを鳴らしながら歩き通した。天気は、雨時々横殴りの雨または霧。視界は二〇米ほどしかない。それでも「アリューシャンでは良い日和」なんだそうだ。地図とコンパスだけを頼りに、山があると信ずる方向に向かった。



山頂直下で筆者

シシャルディンは、今も噴煙を上げる活火山。今世紀中に四十回も爆発したといい、ほぼ全島が、溶岩でできている。暴風雨で一日沈殿し、十三日、小雨と濃霧の中をアタックに出発した。赤旗を立てながら進んだが、コンパスで小刻みに方向を確認しながら、まさに手探り。一七〇〇米付近からクレバスが登場し、アンザイレンする。裂け目はかなり深く、右往左往しながら幾つ越えただろうか、かなりの時間を費やした。二五〇〇米付近で、それまで視界を奪っていた霧雨が嘘のように突然、晴れた。斜面一面が、

見たこともない巨大なエビの尻尾で覆われている。我々はずっと、かなり冷えた雲の中を今まで歩いていたらしい。山頂が初めて見えた。三十五度はある傾斜はきつかったが、無事に着いた山頂は真っ白な亜硫酸ガスですぐにのどが痛くなった。すでに午後八時ごろ。振り返ると、登ってきた斜面でぱっくりと口を開けている大クレバス帯が見え、ぞっとした。下りは結局、二二〇〇米地点の雪上でツェルトを張ってビバーク。翌日、C1にまで下山した。登頂は世界で二番目。一昨年の長野県岳連隊に続く登頂だ。シシャルディン峰は、技術的にはそれほどでもないライトエクスペディションだが、やっぱりなのは霧。赤旗もほとんど役に立たないほど濃く、しかも尾根のない円錐形の山のため、特に下りは少しでも方向を違えるとテントに帰り着けない恐れがあった。しかし、そんな状況で威力を発揮した機器があったので、参考に紹介しておく。GPS（グローバリング・ポジショニング・システム）といい、衛星を使って今いる位置（経緯度）を正確に表示してくれる。誤差は約二〇米。行きたい（帰りたい）場所の経緯度をあらかじめインプットしておけば、

常に正しい方向へと誘導し、目的地までの距離も示してくれた。日本でも三万円程度で手に入る。ウニマク島の自然についても触れておきたい。動物はグリズリーのほか、カリブー（トナカイの一種）、ホッキョクギツネ、ホッキョクジリスなど。グリズリーは実際、テントの至近距離にまで接近してきた。しばらく対峙したが、幸いにも熊のほうで僕らを避けた。翌日も、湿原で十九頭のグリズリーが戯れるのが遠くに見える。ガイドによれば、何百頭も生息しているという。鳥も無数。カモメやカモの類からアビ、鶴、白鳥まで。ちょうど、川は産卵シーズンを迎えた紅ジャケでいっぱいだった。イクラに似せた疑似餌でルアーを投げると、まさに入れ食



モレーン上のアタックC1,000Mから望むシシャルディン=アリュシャンのウニマク島で

い状態。もっぱら釣れるのは、サケの卵を狙ってうようよしている「ドリーバーデン」で、日本では北海道で言うオシロコマ。ピンクの斑点が美しいトラウトだ。体長は五〇センチ以上あり、引きも醍醐味があったが、味もまた抜群。サケとは比べ物にならなかった。

まさに最後の秘境のような地だったが、難点は遠くて金がかかること。水上飛行艇のチャーターとガイド代がかさむ。クマ対策だけでなく、天候が悪いアリュージョンではガイドがいないと無理。ちなみに、スコットは長野隊でもガイドをやり、ホスピタリティーにあふれた気さくな人柄だ。また、アリュージョンにはシシャルディンよりもハードな山はいくらでもある。命の洗濯にはもってこいの場所ではある。

会 務 報 告

- 一、役員交替の件
- 二、新入会員
- 三、針葉樹会一般会計平成七年度決算
- 四、針葉樹会遭難対策基金平成七年度決算
- 五、針葉樹会一般会計平成八年度予算
- 六、針葉樹会遭難対策基金平成八年度予算
- 七、新名簿の発行が予定されておりますので、異動事項がございましたら総務幹事までご連絡

絡下さい。また、知人会員（特に海外からの帰国の方）の動静もご存じの方はご連絡をお願いいたします。

淵澤 貴子

〒一八三 府中市武蔵台三―四七―四

第二松浦コーポ二〇一

☎〇四二三―二七―二〇〇九

新旧役員対照表

(1) 会長、副会長（平成八年度）

会長 石原 脩（留任）

副会長 高崎 治郎（留任）

(2) 評議員（平成八年度）

松下 順吉 S二九年卒（留任）

小林 茂雄（議長）S二九年卒（留任）

樋口 洪 S三年卒（留任）

田中 一雄 S三年卒（留任）

石井左右平 S三年卒（新任）↑横山皖一

山本健一郎 S三年卒（留任）

中村 保 S三年卒（留任）

上原 利夫 S三年卒（留任）

中島 寛 S三年卒（留任）

倉知 敬 S三年卒（留任）

（佐藤 久尚 S四年卒 退任し、補充無し）

中村 雅明 S四年卒（留任）

井草 長雄 S四年卒（新任）↑松尾信孝

藤本 敏行 S五年卒（新任）↑兵藤元史

(3) 幹事（平成八年度）

代表幹事 西牟田伸一（留任）

総務幹事 吉田 茂（新任）↑川名真理

会計幹事 田形 祐樹（留任）↑米田篤裕

会報幹事 中村 保（新任）↑引地 真

井草 長雄（新任）

稲毛 尚之（留任）

山行幹事 近藤 泰（新任）↑兵藤元史

学生幹事 古瀬 泰介（新任）↑白石章治

古瀬 泰介（新任）↑西牟田伸一

古瀬 貴子（新任）↑天羽康之

古瀬 貴子（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）

古瀬 泰介（卒業年次・平成八年）



一般会計平成7年度決算

(平成7年6月1日～平成8年5月31日)

(金額単位：円)

支 出			収 入		
項 目	金 額	(予算額)	項 目	金 額	(予算額)
会報発行費	358,315	400,000	納入会費	768,500	800,000
通信連絡費	62,273	80,000	雑収入	1,616	200
総務雑費	55,602	100,000	前年度繰越	15,927	15,927
学生保険	39,360	70,000			
山岳部補助	150,000	150,000			
次年度繰越	120,493	16,127			
合 計	786,043	816,127	合 計	786,043	816,127

遭難対策基金平成7年度決算

(平成7年6月1日～平成8年5月31日)

(金額単位：円)

支 出			収 入		
項 目	金 額	(予算額)	項 目	金 額	(予算額)
学生保険料	39,360	70,000	前年度基金有高	5,241,230	5,241,230
当年度基金有高	5,275,007	5,341,230	利 息	33,777	100,000
			学生保険料	39,360	70,000
合 計	5,314,367	5,411,230	合 計	5,314,367	5,411,230

一般会計平成8年度予算

(平成8年6月1日～平成9年5月31日)

(金額単位：円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
会報発行費	400,000	納入会費	700,000
名簿発行費	150,000	雑収入	500
通信連絡費	60,000	前年度繰越	120,493
総務雑費	60,000		
学生保険	40,000		
山岳部補助	100,000		
次年度繰越	10,993		
合 計	820,993	合 計	820,993

遭難対策基金平成8年度予算

(平成8年6月1日～平成9年5月31日)

(金額単位：円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
学生保険料	40,000	前年度基金有高	5,275,007
当年度基金有高	6,381,683	基金新規積み増し(注)	1,071,676
		利 息	35,000
		学 生 保 險 料	40,000
合 計	6,421,683	合 計	6,421,683

(注) 基金新規積み増し内訳

カカボラジ登山隊収支剰余金 1,071,676

編集後記

大変時間がかかりましたが、ようやく会報をお届けすることができました。

今回は海外の山々に関する紀行文を多数お寄せ頂きました。

私より相当先輩(失礼)の方々の山登りの取り組み方、楽しみ方が痛烈に感じられ、その気力・行動力には全く頭が下がる思いです。このような文章に触れる度にいつも自分の中に何か青春の断片を思い起こさせられるのです。

最後になりましたが、前回の会報を甘利さんの奥様にお送りしましたところ、大変ご丁寧なお礼の手紙を頂戴いたしましたことをこの場を借りてご報告いたします。



HT

